

家庭学習応援だより

第9号

先日は、2回目のアンケートへの協力ありがとうございました。今回のアンケートでは、ご家庭での取組について一歩踏み込んで伺いました。気になる結果ですが、選択式の結果は次号以降にご紹介します。また、記述の部分については、今号で全部は紹介できないですが、多かったものや他の保護者の方にも知ってもらいたいと思う情報を中心にまとめてみました。

さらに、今号では先日行われた県学力診断テストの結果について、触れていこうと思います。県平均も出たところですので、本校児童の平均と比較してみたいと思います。本校児童の傾向として強みは何で、弱みはどこなのでしょう。まずは、本校の学力診断テストの結果からお伝えしていきます。

本校児童の結果は？



ここでは、本校と茨城県全体の平均正答率を比較して、学校や家庭でどこに力を入れて学習したらよいかを考えてみたいと思います(本校の数値を明示することは控えます)。本校児童の多くは、家庭学習でも国語や算数に取り組んでいるようですが、なかなか結果に結びついていないのが現状です。

どの教科の学習にも言えることですが、算数は「解き直し」が重要です。学力診断テスト一つとってみても、どれだけ児童が「解き直し」をしているでしょう。問題を解く行為は、自分が解けるか解けないかを振り分ける作業です。解けなかった問題を解ける問題に変えていくのが、本来の勉強のはずで、日を置いて自力でできるようになるとよいと思います。さらには、家族や友達に説明できるレベルにもっていけると理想的です。

県平均正答率	国語	社会	算数	理科
第4学年	71.4% (▼)	63.1% (▼)	61.1% (▼)	77.0% (—)
第5学年	76.1% (▼)	71.5% (▼)	59.9% (▼)	72.5% (▼)
第6学年	72.6% (▼)	65.2% (▼)	68.3% (—)	80.4% (▼)

※ ()の▲は県平均よりも5ポイント程度、▲は10ポイント程度、本校児童の正答率が高い。▼は県平均よりも5ポイント程度、▼は10ポイント程度、本校児童の正答率が低い。—は、上下5ポイント以内

県平均を上回る教科がありませんでした。職員もこの結果を重く受け止めています。個票が却ってきたらご確認いただきたいですが、おそらく個人的に見ても、前年度より大きく成績を落とした児童は少なくないかもしれません。正直なところ、統合前からは信じられない結果です。この1年の統合を含めた環境の変化、人間関係の変化など、子どもたちが学習に集中できない、あるいは気持ちが学習に向かない状況が原因の一つにあるかもしれません。ひょっとしたら、親御さんたちの中にも、思い当たるところがあるかもしれません。心理的安定は学力向上のための土台となるものです。

ただ、統合前は旧4小学校の結果を合計しても、ここまでではなかったもので、学校の責任は大きいと考え、学習指導や学力向上に向けた研修を今年度以上に進めていきたいと考えています。保護者の皆様には、子どもの学力向上のために、これまで以上にご家庭での協力をお願いすることがあるかもしれません。

アンケート結果はこちら



全体的な印象としては、学年が上がるごとに親の手を離れているようです。子どもの発達から考えれば、徐々に離れていくのは当然なのですが、本校の場合はターニングポイントが、5年生のようです。記述の回答の部分を見ると、4年生までと比べると空欄が多い印象です。また、子どもの取組も「(見ていないので)わからない」、「親が言わないとやらない」、「(学校の)宿題しかやらない」など、ネガティブな声が聞かれました。4年生までは、学習の様子を気にかけていたり、励ましやほめるなどの声をかけたりしている保護者は比較的多いようです。ただ、先程の学力診断テストの結果から考えると、高学年になったからといって、急に「これからは全部自分でやってみな」ではなく、適度な距離を保ちつつ、学習の様子や時には学習の理解度を確認してほしいと思います。

学習の取り組み方としての傾向は、通信教材(チャレンジやポピーなど)やタブレット学習(スマイルゼミやチャレンジタッチなど)、市販のドリルを使って学習している児童が多いようです。特に、低学年で利用している児童が多い傾向が分かりました。

それでは、項目ごとに記述部分をもう少し詳しく見てみましょう。

どのようなやり方で家庭学習に取り組んでいるか

- ・低学年は、市販のドリルが圧倒的に多いです。次にタブレット学習、といったところでしょうか。同数程度、親が作成した問題やプリントで学習している児童もいるようです。
- ・中学年でも、同じような傾向ですが、通信教材が増えてきているようです。特に苦手なところを中心に学習に取り組んでいることが分かりました。
- ・高学年では、問題集やワークブックなどに取り組む児童が出てきています。また、塾の教材に取り組むなど、中学校進学を見据えた学習が目立つ印象です。

どんな声かけやサポートをしているか

- ・低学年では、親と一緒に学習する、わからないところがあれば教える、ほめる・励ますといったサポートをしているようです。印象としては、子どもが、どこでつまづいているかを把握しておきたい方が多いように感じました。
- ・中学年も、低学年とあまり変わらないような感じでした。ただ、子どもの学習への集中に関心があるように感じました。
- ・高学年の傾向としては、全体的には他の学年と変わらないのですが、特に何もしないという回答は、結構ありました。思春期をむかえ、あまりガミガミうるさく言うのもどうかという考えもあるのかもしれません。

学習のための家庭での工夫点

- ・低学年は、集中して学習に取り組めるように、リフレッシュする時間をとって、メリハリのある学習をしているようです。また、学習塾に入塾している児童も数名いるようです。また、習慣化するために下校してから時間を決めている家庭が多いです。
- ・中学年では、学習することの意義を親の学生時代の経験から伝えている家庭があり、親子のコミュニケーションを重視している印象です。また、隙間時間にタブレット学習を取り入れるなど時短の工夫をしている家庭もいるようです。リビング学習でいつでもわからないところを聞けるようにしている家庭が多かったです。
- ・高学年は、ある程度児童本人に預けている部分が多いからか、距離を感じている方がいるようです。家庭学習が習慣化している家庭は、声かけを続ける、家族や兄弟で問題を出したり、一緒に学習に取り組んだりするなどして、対話を大事にしているように感じました。ただ、特にない、空欄という家庭が多かったのも高学年の特徴でした。

おわりに

最近、岸田首相の育休中の「リスキリング(=学び直し)」が批判的になっています。博報堂生活総合研究所の調査によると、「いくつになっても、学んでいきたいものがある」人の割合は1998年の53%から2022年には35%に低下し、過去最低を記録したそうです。

なぜ日本の大人は「学ばない」のでしょうか。原因の一つに、「学びに対する成功体験を持てているかどうか」と言われています。学びにおける成功体験の有無は、大人になっても大きな影響を与えています。「学ぶことが楽しい」という体験をできていない社会人に話を聞いてみると、「自分は馬鹿だから」「もう50歳になったから、新しいことなんて覚えられない」という方が多いようです。日本人にはびこる正解至上主義は、とても根深く、それが日本のイノベーションの阻害になっているとも言われるほどです。

こうした大人の学びへの考え方や姿勢が子どもに影響を与えてはいないでしょうか。政府が育休中にリスキリングを求めるのは賛否あると思いますが、今の子ども達には「学びの成功体験」を多く積ませたいものです。